



# 俺の人生にも、一度くらい 幸せなコラムがあってもいい。

## 第87回 アングルとは何か？

フチ鹿島

今年もプロレスについて考える日々が続く。

2月15日(金)に行われた『プロレスリングマスターズ』にセコンドとして前田日明が登場。相手チームには長州力がいた。ファンの希望通り、長州と前田が後楽園ホールで向かい合うという嬉しい展開(しかも金曜夜8時に!)。

試合後に前田はコメントを出したのだが、その内容も目を引いた。抜粋する。

『プロレスに対して、「決めごとで」っていう定義も浸透しちゃいましたけど、それをわかってても『ひよっとしたらプロレスはリングの上でホントにやり合ってるんじゃないか』って思わせるようなものをね。前田日明自身が成功したのは何かって言うと、業界の人たちまで騙したんですよね。猪木さんもそれができたし、自分もそういう猪木さんを見習って、業界の人間、一緒にやってる人たちも騙すのは最高なんだなってやってきました。』

私がいま印象に残ったのは次の言葉だ。『若い人もそこまでやってね、何が現実で何がウソなのか、何が作り込みなのかってわかんないように、やってるうちにやってる本人もわかんなくなってくんですよ。』(バトル・ニュース)

しかしプロレスは深い。同時刻に大阪で行われた大会の記事は次の見出しだった。『新ベイダーがジャイアントパンダとの3メートル対決で勝利…マサ斎藤さん追悼大会』(スポーツ報知)

『新ベイダーは、風船のように空気で膨張させて大きくなるパンダに対抗してリングイン。3メートルの巨体がリングで向き合い、立会人の初代タイガーマスク(佐山サトル)も絶句。』とある。

前田が「何が現実で何がウソなのか」と言ったそばからこんな世界があった。その翌日には両国国技館で『マッスルマニア2019』が行なわれた。言わずと知れた「プロレスの向こう側」である。この後楽園↓大阪↓両国の並びは素晴らしかった。プロレスは進化し、そして深化している。さらにプロレスについて考える機会があった。雑誌『EX大衆』3月号でのマッコ・デラックス氏のコラム。抜粋する。

『以前だったら、田中みな実とバラエティ番組で一緒になったら、プロレスで言うところの『アングル』をやれたんだけど、もうプロレスは成立しない時代なんだわ』

ある番組で女子アナについて話していたら、「わりとシリアスなネットニュースになってしまった」という。なので今までと同じ感覚で笑いにできなくなっただのを痛感したという。

相手をクサしているように見えて結果的に相手と「上がっていく」。それを『アングル』と呼ぶなら最高の使い方だが、マッコ曰くそれはもうやれない時代なんだと。通りすがりの人が行間を読まないまま信じてしまうから。

私が凄いなと思った言葉は次だ。『だって、そういう時代なんだから。「シヤレがわかっていない」と言うのはナンセンスなのよ。』

ちよっと前までだったら「息苦しくてつまらない世の中になった」とグチを言ったりやよかったのだけど、マッコは「それってただのノスタルジー」と断言。新しいルールの中でおもしろくできる術を見つけていけばいいじゃないかというのだ。テレビの最先端で仕事してる人の言葉だと思った。

その数日後、『アングル』の使い方について「おっ」と思った番組があった。

『水曜日のダウンタウン』(TBS)の「芸人解散ドッキリ、師匠クラスのほうが切ない説」である(2月27日放送)。

ドッキリってテレビでよく見かける手法だ。安心、安定の企画なのだろう。

でもこのドッキリは違った。大御所コンビ「おぼん・こぼん」は8年間で私生活では口をきいていないほど仲が悪いという。そんななか、おぼん師匠からこぼん師匠にニセの解散を打診してもらおうという企画なのである。ところが、おぼん師匠から解散の話は全然出てこない。こぼん師匠への不満が次々に出るだけ。そのうち口論が始まる。ドッキリは吹っ飛んでいるが、視聴

者は不穏試合から目が離せない。

つまり、おぼん師匠はドッキリというアングルに乗っかりつつ、こぼん師匠に「8年ぶりにたまったうっぶんを晴らす」場として利用しているのである。これってテレビの新しいアングルの使用方法ではないだろうか。

バラエティですと言いつつ、リアルな感情のぶつけ合いに利用してもらおう。

『何が現実で何がウソなのか、何が作り込みなのかってわかんないように、やってるうちにやってる本人もわかんなくなってるんですよ。』という前田日明の「プロレス論」がまさにここにあるのではないか。当然ながらそれは視聴者を圧倒する。

こんなドッキリの使い方はあの番組でしかこなせないだろうが、最初は半笑い気味の視聴者を畏れさせるのはつくづく見事。

『アングル』という言葉や概念は安易に使うと危なっかしい言葉だが、マッコ・デラックスにしろ『水曜日のダウンタウン』にしろ、プロレスに敬意を払い理解してる人が使うとこれだけ痛快になるのだ。

面白い「プロレス」はあちこちにある。